

イタリア滞在記

— もう一つの留研報告 —

森田 彦

1. はじめに

1998年4月1日～1999年3月31日の1年間、イタリアのペルージャ大学に海外留学の機会を頂いた。ペルージャはイタリアの中部にある、イタリアの“緑の心臓”と言われるウンブリア州の州都である。その名の通り、緑に囲まれた大変美しい街で、市街地が丘の上に位置するのが特徴である。街には、2000年前の建造物も見られ、古代からの歴史に彩られた街でもある。

当地での滞在の間、研究はもとより、色々と貴重なそして楽しい体験をする事ができた。その一部は学部広報誌等にご報告したが、このたび本誌編集長より、滞在記なるものの寄稿依頼があり、これも留学の機会を頂いた事の一つの義務かと思い、お引き受けする事にした。以下の内容はイタリアで見聞きしてきた事を思いつくままに述べたものである。資料等に基づいて検証した訳ではないので、解釈等については、あるいは筆者の思い違い等があるかも知れない。その点、ご了解の上ご覧頂ければ幸いである。

2. イタリアの大学事情

— 大学卒業への険しい道

太陽の国イタリア、陽気な国民性、そして5ヶ月もある夏休み……。さぞかしイタリアの大学生の生活はバラ色なのでは……等と想像しがちであるが、あに図らんや、彼らは実に質素でかつ勤勉であり、その学生生活も誠

に慎ましやかなものだった。そして、イタリアの大学は（学生にとって）厳しい、というのが率直な感想である。

イタリアの大学にはいわゆる入学試験はない。イタリア国内の高校卒業証明があれば、どの大学にも入学できる（医学系の大学では実習施設等の関係から選抜試験を行う様である）。まさに万民に開かれた大学だ。しかし、その一方で卒業はきわめて難しい。入学時には教室にあふれていた学生達も日増しに減って行き、最初の年度が終了する頃には当初の半分近くになる事も珍しくないとか。私が通ったペルージャ大学物理学科の場合も、4年生になった時点で残っているのは入学時の1/3未満になると言う。ただし、残った4年生達もすぐに卒業できる訳ではない。何名かの物理学科の教授に尋ねたところ、卒業には平均6年にかかるのでは、とのこと。いやはや卒業への道のりは厳しいものがあるが、それでは一体なぜこのように卒業まで時間がかかるのだろうか。

ある教授に尋ねたところ、「それはイタリアの大学が“自由”だからさ。」という答えが返ってきた。不思議に思いさらにその意味を聞いてみると、「教授には開講科目の内容を決める自由があり、学生にはどの科目を（どの順番で）選択するかという自由がある。一方カリキュラムは必ずしも4年で卒業できるよう配慮されている訳ではない。だから（学生にしてみれば）受講計画を誤るとなかなか卒業できないという事になるのだろう。」という事で

あった。物理学科の場合、履修順序を間違えると、例えば量子力学を学んでいないのに核物理学の講義を受講する羽目に陥ることもあるのだとか。ここには、大学では学生が自分の考えで主体的に一つひとつ必要な単位を勝ち取って行くべきだ、という考えが根底にあるように思う。よく言えば、学生の自主性を尊重し高度な自由を与えているという事になるだろうが、反面“放ったらかし”と言えなくもない。とは言え、大学で教える立場からすると、この“大らかさ”は、正直言ってうらやましい気がする。

ところで、卒業が難しい背景には上の他に、その試験形態が理由の一つとして挙げられよう。というのは、専門科目の試験は原則として口頭試問だからだ。単位をとるためには、1対1で教授の口頭試問にパスしなければならない。これではごまかしは効きそうにない。試験期間になると、各教授の部屋の前で不安そうに自分の順番を待つ学生の列をよく見かけた。ある時、廊下を歩いていたらある教授の部屋から大きな怒鳴り声が響いてきた。何事かと思って半開きになった扉からちらっと覗いてみると、部屋では口頭試問の真っ最中の様子。教授の前には一人の女子学生がうつむいていた。状況から察してどうやらこの学生は教授の質問に答えられなかったか、あるいは全く的外れな返答をしてしまったらしい。教授は真っ赤な顔になってホワイトボードに数式を書き始めた。イタリア語の意味は分からないが、恐らく「こんな事も分かっていないのか!」と叱責していたに違いない。外では廊下の少し離れた所で一人の学生が不安そうに聞き耳を立てていた。恐らく彼が次の順番なのだろう。「がんばって!」というつもりで会釈したのだが、彼にはそれに応える余裕はなかった……。

卒業の最後の難関は卒業論文である。この卒業論文の内容が国際的な学術誌に掲載される事もそう珍しくない、という事であるから

レベルはかなりのものである。私のみるところ、日本の大学でいうと、卒業論文というよりも大学院の修士論文に匹敵すると考えた方が良さだろう。この卒業論文が学内の審査委員会に認められると晴れて卒業となる。

苦労して勝ち得た卒業だけに皆喜びも一塩のようだ。レストランを借り切って親類縁者を招き卒業祝賀パーティを催すことも珍しくない。社会からは、大学を卒業するとその分野のエキスパート(の卵)として認められる。その意味で社会的評価は高いのだが、それは(日本の様に)いい就職口に就けるという事を必ずしも意味しない。就職難が続くイタリアでは卒業後希望の職種に就ける卒業生は決して多くはないのである。にもかかわらず、私が接した学生達は皆大学を卒業した事を誇りにしていた。ある卒業生に少し意地悪な質問をしてみた。「イタリアでは大学を卒業するのは大変だ。にもかかわらず卒業してもすぐに就職できない。そんなに苦労してまでなぜ大学に行くのだろうか?」と。それに対して彼は即座にこう答えてくれた。「僕の場合、大学に進学したのは自分の Quality of Life を高めたいから。僕は物理が好きだし、哲学も好きだ。知的刺激を受けることで僕の人生は豊かになるし、実際そうなったと思うよ。そのことと就職するという事は一般には別の事ではないかな。もちろん一致すればハッピーだとは思うけど。」なるほど、しっかりした考えだ。私は彼の答に大きく頷いた。

この様に、大学で学ぶ事に誇りを持っている一方で、彼らは途中で大学を辞めていった多くの同僚達を「他の道を選択した者」と捉えこそすれ、決して落伍者とはみなさない。人それぞれの価値観や適性があるのだから色々とチャレンジする事はいいことだ、という考えが行き渡っているのだろう。こういった考えは、「門戸は広く開ける、しかしそれぞれの適性は自分で判断すべし」というイタリアの大学の学風が醸成したものかもしれない。

い。

日本も、“大学全入時代”が叫ばれ、大学の意義が問われている昨今、このような、誇りを持った学生を生み出しているイタリアの大学に学ぶべき点は多いのでは、と思う様になった。

2. イタリアの郵便事情

よく言われることであるが、イタリアの郵便事情は決して良くはない。とは言っても、滞在中、何度も郵便や小包みのやりとりを行ったものの全て無事授受でき、紛失したものはなかった。その点は信頼できる。問題は郵便物の所要日数である。

滞在中、ペルージャと日本との間で交わした郵便物の所要日数は8日間から4週間までに及んだ。もちろん全て航空便である。所要日数を順番に記録して行くと精度の高い乱数表が作れそうである。もっとも、通常はその所要日数のブレはそう大きくはなく、ペルージャと日本との間で、平均2週間程度で届く。要注意なのは、夏のバカンスとクリスマス休暇の時期。というのはこの時期郵便局の稼働人員の数も減ってしまうからである。(この時期の郵便事情は)最近はかなり良くなったと言われるものの、客観的に見て「昔はもっとひどかった」というのがより適切だろう。特にクリスマス休暇時期の混乱は予想以上で、現地で知り合った日本人学生の話だと、クリスマス前にミラノから出した手紙が3週間かかってペルージャに届いたと言う。もちろんこれは国内便で、混乱の原因は紛れもなく国内にある事がよく分かる。

ただし、このような事情はもしかしたらペルージャの様な地方都市に限られるのかも知れない。というのは、ローマ(ペルージャの約200 km 南)あるいはフィレンツェ(ペルージャの約180 km 北)などの大都市から出すと約1週間で日本に届く事を発見したからである。こちらの方はかなり安定していて、妻

はまとめて手紙を出すときには、買い物を兼ねて列車で2時間弱のフィレンツェから出していた程である。いずれにしても、ローマあるいはフィレンツェからペルージャまで1週間もかかる勘定になる。一体なぜだろう。ペルージャの人はこの事に気づいているのだろうか? 残念ながらついに確かめることなく帰国の日を迎える事になった。

3. イタリア人のやさしさ

ある日、ペルージャ大学でお世話になっているCiofi(チョッフィ)教授と、レストランで夕食を共にした時の事である。我々の注文を取りに来たウェイターはナプキンやフォークを床に落したり、オーダーを何度も聞き返すなど、とても有能とは思えない年配の男性だった。実際、店の女将さんと思われるシニョーラ(夫人)に何度も大声で注意され、従業員の“お荷物”とされる人物のように見えた。彼を眺めていた私を見てCiofi教授が「ヒコ、なぜあの男がクビにならないのだろう、と思っているんだろう?」と話しかけて来た。少し頷くと教授は続けて「私は20年位前からあの男を知っているが、昔からああだった。しかし、組合が強いから一度正規採用すると経営者は簡単にクビを切れないんだよ。でも一所懸命やっているからあれでいいのだ。」と言った。私は少し意外に思った。というのは、Ciofi教授はレストランのサービス等には厳しい人で、ワインのテイスティングの時にも「本来の味がしない!」と言って断ったり、魚料理がおいしいと評判のレストランで食事した時にも(色々尋ねても)ウェイターがワインや料理の事をよく答えられない事に立腹し、二度とそのレストランには行かなくなった事などを知っていたからである。

この時私はイタリアの人の“やさしさ”というものを改めて感じた。というのは、滞在中、弱者に対する寛容さという意味でのやさ

しさにふれる事が多かったからである。

ペルージャの街にはいわゆる“物乞い”のおじさんがいる。毎日街の決まった場所で「ペル・ファボーレ！（お願いします）」と言ってコインをせがむのである。日本の街ではあまり見かけなくなった、というよりも街がその存在を許容しなくなったという方が正確だろう。もちろんこのような人物がいないのに越した事はないが、驚いたのは多くの通行人が彼を邪険にはせずに、時には「チャオ！」と会釈する女性までいる事である。また彼が立つスポットの一つに、あるバル（飲み物と軽食を出すお店）の店先があるが、店主は彼を排除しようとはしない。これをやさしさと言って良いのかどうかは分からないが、少なくとも日本において予想される反応よりも遙かに寛容であるという事はできよう。

この様な傾向は国の施策にも窺える。我々の滞在中はユーゴのコソボ問題が日増しに深刻化しつつある時期だった。それに呼応して、混乱を避けコソボからアドリア海を渡ってイタリアに入国しようとする人々の数が増加傾向にあった。イタリア政府は一旦彼らを施設に収容し保護するのであるが、ニュースは収容施設が不足気味である事を伝えていた。この時政府のとった行動は、彼らいわば不法入国者を排除するのではなく、安全に収容するために沿岸警備体制を強化し、施設の増設を図る事だったのである。

この様な報道にふれる度に、イタリアの国はやさしさなのかな、と思えて来る。これはキリスト教の博愛の精神に基づくものであろうか？ カソリックの総本山のお国柄であるだけに、「的外れではないだろう。」等と思っていた。ある日その点を Ciofi 教授に尋ねてみた。すると「それは面白い指摘だね。確かにそれは一理ある。しかし、キリスト教だけがその理由ではないと思うよ。君も知っている通り、このイタリアはローマ帝国崩壊の後、様々な民族に蹂躪されてきた。その歴史が長

かったために、我々は、国を失い行く場所がなくなった人々の気持ちがよく分かるようになった。ひいては弱者の気持ちをよく理解するようになったのではないかな。もっともこれは私の個人的考えだが……。」と答えてくれた。さらに「まあ、日本は効率性の高い国だから、それと比べるとイタリアは無駄なことをしている様にみえる点が多いのかも知れないね。」とつぶやいた。

そう、確かに日本では効率性を重視するあまり、寛容さを失って来たのかもしれない。一方、イタリアは効率よりも“やさしさ”あるいは寛容さを大事にする方を選んだ国なのだろう。ある本に、「向こうから乗ろうとしている人が走ってきているのに時間どおりに発車してしまうイタリア電車と、全員のことを待ったがゆえ遅れてしまうイタリア電車、どちらがいい？」という問いかけがあった。私は後者が好きである。身勝手なようだが、イタリアはそうあって欲しいと思う。

4. 職人の国

イタリアは職人の国である。北イタリアのクレモナでは名器を生んだストラディバリ以来のヴァイオリン作りの伝統が根付いているし、ルネッサンスの街フィレンツェを歩くと、工房隣接の草細工のお店がそこかしこに見られる。ペルージャでも、毎日大学に向かう道路沿いには、頑固そうな額縁職人のおじさんのお店や、ピノッキオに出てくるおじいさんの様な出で立ちをした靴職人の作業場などがあつた。この他、伝統的な家具職人や、何百年も前と同じ製法で煉瓦を焼く職人などがいて、まさにイタリアの至る所で職人が活躍している。いわゆる職人の名人芸が尊ばれるお国柄なのである。

しかし、確かに職人の数は多いもののその全てが名人という訳ではない様だ。中には信じられない様な（稚拙な）仕事をする職人もいるから要注意。例えば、我々の借りたアパー

トの寝室の窓は鍵の一つがかからなかった。これはレバーを倒して錠をかける方式なのだが、レバーがそれを受ける凹状のクイに届かないので、物理的に鍵をかけられないのである。以来、我々はそれを鍵ではなく装飾品と考える事にした。一体これを作った職人は何を考えていたのだろうか？ また居間の窓は枠がゆがんでいるため、きちんと閉めても下の部分にかなりの隙間が出来てしまう。さらに少し湿気を帯びるとゆがみが大きくなるため、一度窓を開けるとなかなかきちんと閉まらない。私が全身の力を込めて押しつけてようやく閉める事が出来るという状態である。これを設計した職人はきちんとサイズを測ったのだろうか？ そう言えば、Ciofi (チョッフィ) 教授はよく「イタリアでは信用できる職人とかかりつけの医者を見つけておくことが必要だ。中にはとんでもないヤツがいるからな。」と言っていたが、なるほどその通りだ。

そのCiofi教授にしても痛い目にあった事がある。私は物理学科の客員研究員用の部屋を借りていたのだが、ここには不定期に国内外の研究者が滞在する。そこで、ゲストとして滞在する研究者のために合い鍵を作っておこうという事になった。早速Ciofi教授は駅前の鍵屋さんで5本複製して来た。ところが試してみると、信じられない事にその内の4本は使いものにならない、つまり鍵がかからない事が判明した。そしてもっと信じられない事に、残る1本は鍵がかかったもののうまく抜くことができず、何度かガチャガチャ回している内にグニャリと曲がり二度と使えなくなってしまった。さすがに、Ciofi教授もこの時は啞然としていた。結局、後日別の鍵屋を探して複製を作る事にした。

この数日後、スペインの大学でポスドクとして活躍している若手研究者セルジオがやって来た。彼はペルージャ大学出身でCiofi教授の下で研究をしていた。その時の共同研究を論文にまとめるために夏休みを利用してペ

ルージャに戻って来たのである。彼が「ヒコ、鍵を貸してくれないか？ 合い鍵を作りたいのだ。」と言うので、「いいよ、どうぞ。」と言って鍵を渡す際、先日の合い鍵騒動の事が気になって「合い鍵はどこで作るの？ 実は……」と言おうとしたら、「ああ、合い鍵を作る店なら何軒も知っているよ。すぐに戻ってくるから大丈夫！」と行って部屋を出ていった。そう、彼はペルージャ生まれ。何もかもよく知っているだろうから心配はいらない。それにCiofi教授とは違う店に行ったようだし……。しばらくして、セルジオが戻って来た。セルジオから鍵を返してもらう際「あの……、合い鍵を試した方がいいのではないかな。」と言うと、「そうだね」と言って早速彼は鍵をかけてみた……。ところが何度かチャガチャ回してみても鍵はかからない。その時セルジオがつぶやいた。「しまった。あそこ(の鍵屋)はだめだったのだ！」どうやら、いい職人を見つける事はイタリア人にとっても難しい様である。とにかく、確かな事はペルージャには決して行ってはいけない鍵屋さんが、少なくとも2軒あるという事である。

5. サッカーの国

—ペルージャでの熱狂振り

言うまでもなく、イタリアではサッカーは国民的スポーツである。ファンの熱狂振りも、ものすごい。イタリア全土の至る都市に地元のサッカーチームがあり、そのチームが1部リーグ(セリエA)に昇格となれば街の格も上がるといった風潮があるので、自然地元ファンの応援にも熱が入るのだろう。

実は、ちょうど我々の滞在中に(確か6月末頃)地元のペルージャがセリエAに昇格し、その時は街中が大変なお祭り騒ぎだったらしい。らしい……。というのはちょうどその時、私はエルバ島で開かれていた国際会議に出席するためペルージャを離れていたからである。しかし、エルバ島から、ある夜ペルージャ

にいる妻に電話をかけた時、彼女が「何が起こったか分からないけど、通りは今大変な騒ぎなの。電話の声もよく聞こえない……。」と戸惑った口調で話していた事を思い出す。ちょうどその日が昇格決定の日だったのだろう。あとで聞くとその日は夜通し騒ぎが続きおかげで妻は一睡もできなかったとのこと。セリエAへの昇格は、かくもめでたいことなのである。

さて、昇格を決めると次の目標はセリエAに残留する事である。その助っ人として、日本から有力な選手がやって来るという話題が早くからファンの間に上っていた。それがあの中田選手だったのである。最初は物珍しさから注目されていた感があったものの、シーズンが始まって数ヶ月後には、立派な中心選手になっていたから見事なものである。チームもセリエAの中位の順位をキープしていた。

ところが、シーズン途中である事件が起きた。選手起用にまで口をはさむチームのオーナー、ガウチ会長に嫌気がさして監督が抗議辞任したのだ。地元ファンはもう大騒ぎ。ファンにとって、監督はペルージャをセリエAに導いた英雄だ。会長が指名した新監督を認めないという強硬グループも出てきて、練習場にまで、「新監督は認めない！ ガウチ(会長)やめろ！」となだれ込む始末。練習場に集まったファンへ報道陣が、「ガウチ会長に何かコメントがありますか？」とマイクを向けると「ポルケッタ（豚の丸焼きで、地元の名産でもある）にしてやる！」との声が上がった。イタリアでは、サッカーチームのオーナーになる事は名誉であると共に命がけの事なのだ。かつて、フィレンツェのチームにいたロベルト・バッジョというスーパースターが他チームに移籍した際、それに激怒したファンが(移籍を了承した)オーナー宅に放火した、と言う事件もあったとか……。

このような、ピリピリした雰囲気が続く中、

監督交代劇後の最初の試合「ペルージャvs インテル・ミラノ」が迫っていた。そして、偶然、我々が手に入れたチケットがその試合だったのである。報道では、試合内容によっては、強硬なファンが暴走するかもしれない、という危険性が指摘されていた。しかし、せっかく手に入れたチケットを無駄にする訳には行かない。また、いくら何でも“暴動”になる様な事はないだろう。そう思って我々も予定通りスタジアムに向かう事にした。

試合に際しては、チーム側が警察に嚴重警備を依頼したらしく、スタジアム周辺は物々しい警備体制が敷かれていた。入場時には、防寒具とカメラの入った私のバッグも、厳しくチェックされた。そうして、スタジアム上空では、警察の監視ヘリコプターが旋回し、スタジアム内も警官が巡回している、という状況の中、試合は始まった。通常なら、地元チームが圧倒的に有利なのだが、この日の雰囲気は、地元ペルージャの選手にとっても相当なプレッシャーになったのではないだろうか。しかし、試合は中田の活躍もあり、ペルージャ優勢で進み、ついに「2-1」で勝利をものにした。やはりファンは勝てばうれしい。陰湿な雰囲気も、上位チームを破った喜びから、お祭り騒ぎに変わった。地元ファンのスタンドから発煙筒の様なものの炎や爆竹の音が聞こえ、大変なはしゃぎ振りである（それにしても、これらはどうして入り口でチェックされなかったのだろうか？）。

心配された、“暴走”もなく、無事試合が終わったのを見届けながら、前日の新監督のインタビューを思い出した。この新監督は、「明日の試合は大変な状況だが、心配ないか？」と質問された時に、「私はこれまで何度も“地獄”を見てきた。ファンは勝てば喜ぶ。心配はしていないよ。」と語っていたのである。結局、この新監督の言う通りになった。彼は、ヨーロッパの色々なリーグをわたりあるいて来た“猛者”らしい。これが経験というもの

か、と妙に感じ入ってしまった。

さて、試合が勝利に終わって、ファンの暴走という驚異は去ったが、もう一つの驚異が待っていた様だ。試合後、国鉄駅に向かうと、そこは中田選手の応援に来たと思われる日本人だらけ。その風景だけを見ていると、日本の地方都市の駅前かと錯覚する程だ。その様子を眺めていた男の子が、「tutti Giaponesi (みんな、日本人だ)！」と声を上げて驚いていた。もっとも、“日本人来襲”の驚異は、ペルージャに多額の経済効果をもたらした筈であり、地元にとっては大歓迎だったに違いない。まさに、“ナカタ効果”である。その中田選手も、本年(2000年)、名門チーム、ローマに移籍して行った。もはや、ペルージャを“日本人来襲”の驚異が襲う事はないだろう。

6. ウンブリア州の祭り 1

—グッビオのローソク競争

5月15日に、ペルージャの北東約50km程のところにあるGubbio(グッビオ)という街に行った。ここは、ローソク競争の名で知られる祭りで大変有名な所だ。と言っても、私もこちらに来て初めて知ったのだが……。

実は、これは待ちに待った祭りなのである。というのも、こちらに来て以来、何人もの人に「ヒコ、こちら辺には色々な祭りがあるが、グッビオの祭りはすごいぞ！ 他の祭りは今では観光客向けになっているものが多いが、ここは違う。グッビオ市民が楽しむための祭りなのだ。祭りの時にはグッビオ市民は、皆クレイジーになる。そう、クレイジーじゃなければ、あんな祭りはできないんだ。本当のイタリアの祭りを見たければ、グッビオに行っておいで。」と、口々に勧められていたからである。そして、Ciofi(チョッフィ)教授も、「ヒコ、ぜひグッビオに行っておいで。とにかくすごいから！」と言って、グッビオ行きの手配をしてくれた。同じ物理学科にグッビオ出身の妻を持つ教授がいて毎年祭りに参加す

るので、前日からその教授夫妻のアパートに泊めてもらえる様手配してくれたのだ。こうして当日は、朝からまる1日祭りをたのうする事ができた。

この祭りは800年以上の歴史を持つもので、木で作られたローソク状の柱を台座に固定し、それを御輿の様に担いで町中を走り回るといったものだ。ちょうど、岸和田の“だんじり”を連想させる。だんじりの場合は町内毎に山車を出す様だが、こちらは街を黄、青、そして黒の3チームに分け、その3チーム間でローソク競争を行う。ただし、今では、速さを競うものではない。その昔は、本当の意味での競争だったが、そのため、毎年死者が出る程の危険なものであったらしい。そこで、今では走る順番は予め決め、走っている時の美しさを競うものになったのだそうだ。

とは言っても、この巨大ろうそく、重量は400kgもあり、高さも見たところ優に3mは越えていた。これに、各チームのシンボルである飾り(街の守護聖人の人形)をつけて担ぐと高さは5m近くにもなり、これを担いだまま全力疾走で町中を駆け抜けるのだから、極めて危険である事には変わりはない。私は、泊めて頂いた教授夫妻に教えてもらい、ちょうど、直角に曲がる場所で見えていたが、3チームとも見事にカーブを曲がっていた。しかし、これだけの重量と高さである。スムーズに曲がれる筈がない。私の見たところでは、担ぎ手とその周りを伴走している者同士が激しくぶつかり合い、いわば人間のクッションで曲がっているという印象を受けた。曲がる所は見所らしく、応援する観衆も興奮の頂点に達し、男女を問わず悲鳴に近い歓声を上げていた。

また、皆全力疾走で走るのだから、当然担ぎ手も交代しなければならない。この交代、つまりバトンタッチもすさまじく、ほとんどスピードを緩めないまま、次の担ぎ手に手渡すのだ。当然ながら、場合によっては新旧の

担ぎ手がぶつかり合う事になり、実際ぶつかり合う音が我々にも聞こえて来た。何とも壮観だ。しかし、もちろん痛がっている担ぎ手はいなかった。何と言っても、この担ぎ手になるのは、グッビオの男として名誉なことなのだから。走り終えた担ぎ手は、皆「よくがんばった！」という様にお互い抱き合い、健闘をたたえ合っていた。祭りも一種のスポーツのようなものなのかもしれない。

最後の中継地点を見終わると、皆一斉に山に登り始める。実はこれからクライマックスなのだ。信じられない事だが、このレースの終点は山の上にある教会である。教授夫妻と一緒に上ったのだが、相当な勾配で、教会まで歩いて約30分かった。上から見下ろすとグッビオの街を一望できる絶景で、かなりの高さである。ゴールの教会で待っていると、本当にあのローソクがやって来た。よくもこの山道をと、とても信じられなかったのだが、勢いよく教会の階段を上り、そして門をくぐって中へ入って来た。受け入れる教会の中庭は待ち受ける観衆で、身動きがとれない状態。そしてこの狭い場所で再び各チームがローソクを担いでグルグル1周し出した。若者達は（女の子も！）教会の柱によじ登り、しがみつきながら声援を送っていた。最後に、ローソクを台座から外して教会の中に奉納して、これでようやく祭りは終了。最後まで熱狂的な、そして勇壮な祭りだった。

実は、この祭り、単に勇壮なだけではなかった。レースが始まる前の日中（レースは夕方始まる）、各チームはローソクを担いで、レースのコース以外の道をくまなく回る。これは、実際のレースを見ることができない人に見せに行くという意味がある様だ。特にお年寄りには、ローソクの後について走り回る事ができないので、この時しかローソクを見ることができない。そこで、建物の2階などにお年寄りを見つけると、そこに立ち止まり、ローソクを勢いよくグルグル回していわばデモンス

トレーションを見せてあげる。そして、そのお年寄りがローソクに触れられるように、ローソクを窓口に傾ける。お年寄りがローソクに触れ礼を言うと、担ぎ手の若者達がお年寄りに祝福の声援を送る。街の守護聖人が飾られたローソクに触れると、長寿あるいは幸運が訪れるという意味があるのだろう。祝福を受けたお年寄りは、涙を流して喜んでいて。また、喜んでいる老人に共感して、それを見上げる担ぎ手の若者も涙を流していた。高齢者へのいたわり、あるいは尊敬の念が伝わる、何ともいい光景だった。ただ、勇壮さを競うだけではなく、こういった面も、祭りの伝統としてずっと古くから受け継いできたのだろう。

このデモンストレーションの時に、私も少しだけ、ローソクを担ぐことができた。例の教授夫妻が「遠く日本から友人が来ているから……。」と頼んでくれたのだ。担ぎ手に加わって、数10メートル程走った。確かに、ずっしりと肩に重みを感じる。また走る度に肩の上で台座の棒がバウンドするので、とても痛いのだ。ほんのちょっと走っただけで、赤い大きなあざが出来てしまった。まあ、名誉の勲章と言ったところだろう。周りの人も、グッビオでは、まだ日本人は珍しいらしく、「ジャポネーゼ！ サヨナラ、ハラキリ！」と妙な声援を精一杯してくれた。ほんの一瞬とは言え、グッビオの“勇者”達に加わることが出来、私にとっては最高の思い出になった。噂通り、グッビオの祭りは素晴らしかった。今でも、肩をさすると、あの、ずっしりとした重さの感触が甦って来る。

7. ウンブリア州の祭り 2

—ウンブリア Jazz フェスティバル

伝統的な祭りではないが、ペルージャで最大のイベントと言えば、7月に開催される「ウンブリア Jazz フェスティバル」であろう。我々が滞在した1998年は、7月10日～19日

の日程で開催された。この期間には世界的な Jazz ミュージシャンがやって来て毎日街のどこかでコンサートが開かれる。そしてそれを聴きにやはり世界中から、特に若者が集まってくるので、期間中は大変なにぎわいだった。恐らくペルージャの1年の中で、最もにぎやかな期間と言えるだろう。

フェスティバル初日の朝、我々のアパート（街の目抜き通りに面していた）の前の道路に、若者が何か大きな絵を描いていた。最初は何を描いているのか分からなかったが、翌日になってそれがあのマイルス・デービスの顔であることに気がついた。このように、フェスティバルの期間は大道芸もジャズに因んだものになる様だ。期間中は劇場でのコンサートの他に、毎日、ニューオーリンズの楽団による（デキシード・ジャズの）パレードや、大聖堂の前や広場での野外コンサートが行われた。そして、それ以外にもギターやサックスを担いできた若者達が通りで即興の演奏を行うので、期間中はまさに街はジャズ一色になる。中世の面影を残したペルージャだが、サックスの音が石作りの古い建物にこだまして、意外にもジャズの雰囲気はこの街にびったりとはまっていた。

我々もいくつかのコンサートを聴いた。特に街の大聖堂の前で行われた、ロサンジェルのグループによるゴスペルのコンサートは圧巻で、黒人特有のリズム感と声量の素晴らしさに圧倒されてしまった。妻によると、このグループが何年前に札幌公演に来た際には、チケットが6千円以上もしたとのこと。ところが、ここでは無料！ 彼女は期間中、何と4度も聴いたそうである。

その他に、公園に設けられたステージでのコンサートにも行ったのだが、こちらは6つ位のバンドが入れ替わりで演奏していて、ロックンロールあり、ラテンミュージックありで、いずれも大変な熱気だった。ところで、妻によると、意外な事に「イタリア人のノリ

は悪い！」のだそうだ。確かに、野外コンサートの際も、じっと聴いている若者が多く、「ペルージャは眠っているのかー？」とボーカリストが煽っている場面があったとのこと。日本も昔はそうだったと思うが、ある意味で今の日本の若者はアメリカナイズされてしまい、“ノリ”も良くなっている。それに比べると、ここイタリアでは、若者でもそう簡単に外国文化に影響されないものと見える。もっとも、これはペルージャという土地柄があるのかもしれないが……。

フェスティバルの最終日の19日、Ciofi 教授夫妻が予定していたミッドナイト・コンサートに行けなくなったので、そのチケットを我々に譲ってくた。音楽好きの妻は大喜び、喜んでコンサートに出かける事にした。コンサートが始まるのは何と深夜0時過ぎ。文字通り深夜コンサートで、劇場に入ってみると我々の席は2階の個室だった。外国のコンサートのテレビ中継等で見た事はあるが、実際にこういうコンパートメント形式の劇場に入るのは初めてだ。少し、リッチな気分になったが、このチケットは日本円で2,400円程度。何も特別な事ではなく、こちらでは劇場は皆この形式の様で、こういう点はさすがヨーロッパだと妙に感心してしまう。コンサートは若手のジャズ・トリオによる演奏で、スウィングあり映画音楽ありの楽しいものだった。彼らは三度アンコールに応えて、演奏が終わったのは午前2時頃。劇場を出てから、散歩をしながらアパートに帰ったが、通りにはまだまだたくさんの人がいて、皆フェスティバル最後の夜を楽しんでいる様だった。

翌朝は、いつも聞こえていたトランペットやサックスの音がなくとても静かな朝だった。通りも清掃車が水を流しながらきれいに掃除をして、あのマイルス・デービスのペイントも消えてしまっていた。こうして、ペルージャ最大のイベント、ジャズ・フェスティバルは終わったのである。

8. ウンブリア州の祭り 3

—グワルド・タディーノの秋祭り

9月27日(日)に、ペルージャの北東50km, グッピオよりもさらに東に位置するGualdo Tadino (グワルド・タディーノ) という街の秋祭りに行ってきた。ちょうどこの時期、イタリア旅行に来ていた友人夫婦がペルージャを訪ねてきたので、この機会にイタリアの田舎祭りを体験してもらおうと、4人で出かけたのだ。既に我々はウンブリアの祭りのとりこになっていた。

グワルド・タディーノは、イタリアの中央を走るアペニン山脈のすそ野にある街で、山あいの静かな、そして風光明媚な所だった。ここで9月25日～27日の日程で秋祭りが行われていることを情報誌で妻が見つけたのだ。当日は最終日で、地区対抗の競技会が行われているところだった。これは、街を4つの地区に分け、様々な競技結果の総合得点で勝敗を競うという内容である。街を幾つかの地区に分けて競い合うという趣向は、アッシジそしてグッピオでも同じだったので、どうやらこの辺りの祭りの一般的なパターンの様だ。

さて、最初の競技はロバレースである。これは、ロバに小さな荷馬車を引かせ、2名の騎手がロバを操り、そのタイムを競うというものだ。レースは街の広場(ペルージャの様に高台にある)から、通りを駆け下り、また広場に戻るという1km程のコースで行われ、1チームずつ順番に走る。沿道は応援の観衆でぎっしりで、自分たちのチームが来ると、力一杯の歓声を上げていた。街頭のスピーカーからはプロレス中継の様に、興奮した口調の実況中継がとぎれることなく流されている。いやはや、こんな小さな街のどこにこんなエネルギーが……、と圧倒されてしまう。ところで、走るのが馬ではなくロバなので、どこかユーモラスな雰囲気漂っている。そして、一般にロバは馬のように言うことを聞

かない。こちらには、言うことを聞かずに駄々をこねると「ロバのように……」という表現がある程だ。案の定、「ルパン」という名前のロバ君は、スタートの合図があっても走り出さない。スピーカの実況中継からは、しきりに「ルパン、ルパン！(イタリア語では「ルピン」になる)」と名前を連呼するが、ゆっくり歩くのみで一向に走り出すけはいがない。遂に、騎手の一人が荷馬車を降りて件のルパン君を引っ張り始めた。地区の勝敗がかかっているだけに騎手は必死だ。その甲斐あってようやく走り出すと、沿道の観衆は大喜び！しかし、タイムは他のチームの3倍近くで、ゴール後、騎手は頭を抱えていた。

レースが終わると、通りに散っていた観衆が皆一斉に(丘の上の)中央広場に集まり始めた。どうやら次の競技が始まるようだ。小さな広場はすでに人でぎっしり！文字通り、立錐の余地もない状態だ。しばらく待つと、次の競技が始まった。今度はゴム鉄砲のような器具で壁にかけられたお皿を割る競技だった。二股の棒にゴムをかけて石をはじき飛ばすというものだ。玉は5つ、的は20m位の距離だったが、弓のように(射出方向が)安定していないため、かなり難しくみえた。1チームずつ壇上に上がって競技を行うのだが、1回打つ毎に、周りの観衆が割れんばかりの歓声を上げるので、代表選手の若者にとってはすごいプレッシャーである。実際、最初の競技者は2つ続けて的を外したのだが、外した瞬間天を見上げて祈るようなしぐさをしていた。その2つ後のチームの選手は極めて冷静で、観衆の(早くやれという)催促に惑わされず、1回打つ毎に慎重に時間を取り、見事5つ全部命中させた。終わった瞬間、彼は興奮した仲間の若者達に胴上げされるように担ぎ上げられ、盛んに祝福を受けていた。どうやら彼は今回の祭りのヒーローになった様である。また、4発命中が2チームになったため2位決定戦が行われたのだが、

その決定戦で的を射抜いて見事2位を確保した選手は、喜びと緊張から解放された安堵感から涙を流していた。それ程、各選手の緊張度はすさまじいものだったのだ。

続いては、弓競技。これもゴム鉄砲同様、1回の射出毎に観衆が騒ぐので、精神統一が必要な選手にとっては、大変な精神的負担がかかっている様だった。弓を射終わると、矢が中心からどの程度の位置を射ているのかを、古めかしい中世の衣装を着た審判団が判定する。この審判団の仕草が仰々しくて少し滑稽にも見えた。恐らく、中世以来のやり方を再現しているのだろう。そして審査結果がスピーカから発表されると再び大歓声。ところで、この弓競技の選手は、皆伝統的な衣装を着ていたが、彼らが弓を引いている姿を見ると、中世の戦士が眼前にいる様で、映画の1シーンを見ている様な錯覚に襲われた。日本人に着物が似合うように（最近はどうとも言えないが）、彼らには中世の出で立ちがびったりと来る。

さて、いよいよ最終競技だ。最後の主役はやはりロバ君！ ただし、今度は荷馬車ではなく、騎手がロバ君に騎乗し（しかも鞍なしで）、先ほどと同じコースを一周するという。そして今度は4チーム一斉にスタートするのだから、考えようによっては、極めて危険なレースだ。我々のお目当ては何と言ってもルパン君である。今度は彼がちゃんと走るかどうか……？ 4人でスタートの瞬間に注目していると、今度は件のルパン君、猛然と走り出した。喜んでいると、しかし、今度は勢い余って、何と騎手を振り落としてしまった！ 下は石畳みである。道路に顔面をぶつけた騎手は、口から血を出しながらも必死にルパン君を追いかけ、見事再びまたがる事ができた。何ともすごい執念だが、それほど、地区代表の選手の責任は重大なのだろう。とにかく、皆それこそ必死でがんばっているのである。さて、騎手の熱意が伝わったのか、見事、ル

パン君は1着でゴールインした。しかし、件の騎手はゴール後、（一気に気が緩んだのか）道路に崩れ落ち、とうとう救急車で運ばれてしまった。沿道の観衆は拍手で彼を賞賛していたが、彼も今回の祭りのヒーローになった事だろう。

以上、小さいながらも“壮絶な”祭りだった。これがラテン系の祭りなのだろうか。祭りが終わり、駅のホームで帰りの列車を待っていると、大きな荷物を抱えた人達が続々と暗くなったホームにやって来た。恐らくこの祭りのために帰省してきた人達が、それぞれの家（現住所）に帰るのだろう。イタリアの就職事情は厳しく、大都市周辺以外では若者の職がないのが現状である。職を求めて田舎を離れなければならない事情はある意味では日本と同じだろうか。しかし、遠くに住む様になっても、なお人を引きつける魅力を、イタリアの（小都市の）祭りは持っている様だ。グッビオしかり、このグワルド・タディーノしかり。日本ではこのような村祭りが廃れつつあることを思うと、少しうらやましい気がする。

9. 大晦日のカウントダウンパーティ

一般に、欧米では新年を迎えた瞬間に花火を打ち上げ、バカ騒ぎをするのが通例になっている。日本のニュースでも毎年、ニューヨークにあるタイムズスクウェアの（新年の）カウントダウンのシーン等が放映されるので、私も大体の予想はついていて、しかし、事実は以下に述べる様に予想を遙かに上回るものだった。

12月31日の大晦日の夜は、Onori（オノリ）さんという物理学の教授の家に夕食に招待された。Ciofi（チョッフィ）教授夫妻も一緒だ。Onori夫妻には実はグッビオの祭りに行ったときにアパートに泊めてもらったりして何かとお世話になっている。このご夫妻の家は、谷を隔ててペルージャの街の向かい

に位置する丘の上にあり、ちょうど、ペルー
ジャの街灯りを眺めることができる大変素晴
らしい所にある。そしてお宅は“邸宅”の名
がふさわしい立派なお屋敷だ。居間には大き
な暖炉があり、時々Onoriさんがくべる薪が
勢いよく燃えて、広い家を暖かくしてくれる。
私が「大変大きな暖炉ですね。」という、と、教
授に「いや、それ程大きな方ではないよ。」と
あっさり言われてしまった。謙遜されたのか、
それとも上には上がいるという事なのか
……。

しばらく談笑した後、シャンペンの乾杯で
夕食が始まった。実はCiofi教授は花火を用
意して来ている。1月1日の午前0時を迎え
る瞬間に皆で花火を打ち上げようと言う訳
だ。次から次と料理が出され、楽しい食事が
続いて行く。そして、最後に、皆でレンズ豆
の入ったスープを食べる。これはレンズ豆の
形がお金（コイン）に似ている事から、新し
い年はお金持ちに、つまり豊かになる様に、
という願いを込めての習慣らしい。いわば、
イタリア版“年越しそば”である。さて、レ
ンズ豆のスープを食べ終わる頃に、午前0時
が近づいてきた。皆コートやジャンパーを着
て、庭に出て花火の準備だ。私はCiofi教授と
一緒にワインの空き瓶を発射台に見立てて、
打ち上げ花火の準備をした。周りでは、気の
早い人がすでに花火を上げているらしく、0
時5分前くらいからそこかしこで、「ボン！」
という花火の音が聞こえている。我々は、花
火の準備と共に、新しいシャンペンをグラス
に注いで、新年の瞬間を待った。陽気な事が
好きなCiofi教授のカウントダウンで、「3, 2,
1, 0」と午前0時になった瞬間、花火に点火
した。その瞬間至る所で、まるで空爆でも起
こった様に、「ボボボッ！」という破裂音が鳴
り、盛大な花火の競演が始まった。そして
「Buon Anno！（新年おめでとうの意）」と
言って皆で乾杯した。シャンペンを飲んでい
る間にも、花火の音は益々すさまじくなって

行く。向かいのペルージャ市街では、プロの
花火師が花火を打ち上げているらしく、次々
と大きな花火が上がった。それを眺めようと、
皆2階に上がって、しばし正面のペルージャ
市街地から上がる花火を眺めた。私も札幌豊
平川の花火大会は何度か見たことがあるが、
この様にペルージャの街一帯から次々に上が
る花火の風景は圧巻で、はるかに規模が大き
い。そして、花火が上がった瞬間、ペルージャ
の街のシルエットが浮かび上がるのが何とも
言えず美しい。

その後も“新年パーティ”は午前2時頃ま
で続いた。Onori夫妻にお礼を述べて家を出
た後、我々はCiofi夫妻の車で、ペルージャの
中心街の近くまで送ってもらった。車中で私
が「まだ、中心街はにぎやかでしょうね。」と
言うと、Ciofi教授は「ああ、今日は眠れない
かもしれないよ。」と笑っていた。実際に通り
に出てみてびっくり、通りが立錫の余地もな
いほど、人出であふれ返っているのだ。そし
て通りの至る所で、爆竹の破裂音が聞こえて
騒然とした状況だった。さらに中心街では2
カ所でロックコンサートが行われていて、と
ても深夜とは思えない。夏のウンブリア Jazz
フェスティバルの時よりも、この時の方がに
ぎやかな様に思える。年が明けた瞬間が、恐
らくペルージャの街が最もにぎやかな時なの
だろう。いや、この日はイタリア全土が同じ
様な状況だった様だ（後から、ペルージャは
おとなしい方だと聞かされた）。深夜のロック
コンサートは4時近くまで続き、その後も爆
竹の破裂音が5時頃まで続いていた。我々も
眠りについたのは、5時過ぎだったと思う。
何ともエネルギーッシュな大晦日だった。

翌朝、というよりも昼近くに目が覚めた時
には、通りは極めて静かだった。無理もない。
皆、一晩中騒いでいたのだから……。ところ
で、元日のテレビニュースを見て驚いたのは、
ナポリの状況だ。ナポリでは、皆が通りを目
掛けて打ち上げ花火を発射する、という“悪

習”がある。そのため、毎年、花火に“被弾”して負傷する人が相当数に上るらしい。そして今年は大晦日から元旦にかけて何と700名の負傷者が出たとの事だ。死者が出るのも珍しくないそうで、確かに、両目に包帯をして救急病院に運ばれる若者の姿を(ニュースで見ると、まるで内戦でも起こったかの様だ。もちろん、イタリアでも火力の強い花火はプロの花火師しか手にすることはできない。しかし、実際にはそれらを手に入れる闇ルートがある様で、そうして手に入れた打ち上げ花火を、ビルの屋上から通り目がけて発射するのだから、確かに死者が出ても不思議ではない。ペルージャの人に言わせれば、このよう

な“暴走”は、地中海の“海洋性民族”(典型的にはナポリの人)の特性なのだそう。それにしても、毎年とはすさまじい。呉々も、大晦日にナポリを訪れることのない様にしたいものだ。

以上、1年の滞在で体験した事、感じた事を記してみた。滞在当初は、イタリアと日本との相違点のみを意識していたが、色々な人と接する内に、日本人とイタリア人は内面的には通ずる部分が多いな、と感ずる様になった。何にしても魅力的な国である。共同研究を進めるためでもあるが、私のイタリア通いは当分続きそうである。